混ぜればごみ、分ければ資源　～ごみ問題⑥～

分別収集にご協力を

〝混ぜればごみ、分ければ資源〟を合言葉に、十月から資源ごみの分別収集が始まりました。

資源ごみ収集日当日は、環境指導員による、朝早くからの分別排出の徹底指導と住民のみなさんのご協力により、初回にしては順調に進み、たくさんの資源ごみを回収することができました。（表1）

しかし、燃えないごみの日にまだ空きびん、空き缶が出されていたり、資源ごみの日に古紙をヒモでしばらずに、バラバラに出されていたりしています。

住民一人ひとりの果たす役割が重要となっている今、もう一度ごみ出し表をよく見て、ごみ排出時における、分別排出の徹底に努めてください。

環境指導員による分別排出

町では今後も、限りある資源の有効利用を図るため、資源ごみの分別収集等ごみの減量化、再資源化を推進していきますので、住民のみなさんのご理解とご協力をお願いします。

ごみに関するお問い合わせは、役場保健福祉課までお願いします。

表1.　10月資源ごみ収集実績

空きびん	空き缶	古紙	合計
t	t	t	t
2	1	11	14

12月の資源ごみ収集日程

地区	収集日
横越・川根谷内	17日(火)
その他の地区	19日(木)

秋の環境美化運動実施
全町で1,325名が参加

秋の環境美化運動が九月二十日から十一月十日まで実施され、新潟都市圏構成七市町（新潟市、両津市、豊栄市、聖籠町、黒埼町、横越町）でも、同運動に合わせ、それぞれの地域で実施しました。

本町は、十月二十日に実施。朝はやくから一、三二五名もの人が空き缶回収作業に取り組み、約二・五トンもの量を回収いたしました。

参加された皆さんご苦労さまでした。

姉妹村　美浦村とのホット情報交換（その8）

みんなが主役　手作り文化祭

「輝け美浦の自然と文化」をテーマに、今年で十九回目を迎えた美浦村産業文化祭が、十一月二日から四日までの三日間、中央公民館をメイン会場に開催され、連日、家族連れなど大勢の人で賑わいました。

三日には、公民館お祭り広場で農・水産業祭や各種模擬店、バザーが店を連ね、公民館大ホールでは村内芸能愛好家の舞台発表が行われるなど、それぞれに美浦の特色が生かされた文化祭となりました。

また、祭期間中、保健センターには子どもたちの作品が、公民館ロビーなどには村文化協会等のみなさんの作品が展示され、キラリと光る個性豊かな力作が訪れた人の目を奪いました。

横越町の農産品　今年も大人気

姉妹町村交流を目的に、毎年、美浦村産業文化祭に出店していただいている「横越町物産展コーナー」は、美浦村の住民にも大人気。開場と同時に販売を心待ちにしていた主婦のみなさんなど大勢の方々が詰めかけ、トラック一杯に持ち込まれた〝ごぼう・ながいも・新高梨・チューリップの球根・鮭の味噌づけ〟など全てが開場から数時間で売り切れるという大盛況でした。

人と人との交流から、物と物との交流に広がる交流の輪。これからも大きく広げていきたいですね。

ありがとうございました　赤い羽根協同募金

十月一日から始めた赤い羽根協同募金運動に、ご協力ありがとうございました。

この募金の多くは、平成九年度に町の社会福祉協議会に配分され、各種福祉事業に使われます。

○実績額（目標額に対する達成率は一二四・五％）
　二、四八六、〇〇〇円

○県内の福祉に使われる額
　五九七、〇〇〇円

○町社会福祉協議会に使われる額
　一、八八九、〇〇〇円

文芸欄

（公募作品高点句者）

俳句

句題　鯊（はぜ）・干し柿・秋の霜

地元紙に包み干し柿送りけり　（横越）神田恵子
柿干して一村留守の家ばかり　（木津）坪谷十九一
参道の玉砂利きしむ秋の霜　（沢海）佐藤栄志
柿吊す夕日の中の老夫婦　（木津）笠原茶山
積替えの堆肥の上にも秋の霜　（沢海）渋谷ウタ
砂利船に積む砂利の音鯊日和　（横越）谷井野武士
縁側は話し良き場所柿干さる　（横越）市村横雲子
どう見ても熊の足跡秋の霜　（木津）今井天花
落人の里を鎧ひし柿すだれ　（横越）神田恵子
鯊釣りや夫に離れず寄り添わず　（横越）佐藤ユリ

かしこく選んでおいしいごはん

○米の精米表示制度が変わりました。

「新食糧法」のスタートにより、米を購入するときの判断材料となる表示制度が変わりました。産地、品種、産年が一目でわかるように、全国統一した表示基準で示されます。

原料玄米の使用割合の多い順に、全体の六十％まで産地、品種、産年が記載され、それ以外はその他〇〇％と表示されます。

又原料玄米が多岐にわたる場合は「ブレンド米」と表示できるようになりました。

国の検査を受けない原料玄米が使用されているときは「未検査米」と表示し、その使用割合も記載されます。

○表示の内容をチェック

表示と中身が一致している袋には「認証マーク」や「確認マーク」が付けられます。

○米は信頼のおける「標識」のある店で

県知事の登録を受けた小売業者は「知事登録小売業の標識」を掲示することになっています。

＊問い合わせ　新潟食糧事務所新津支所
☎0250－22－3611

ふる里物語　町史編さんだより㉗

近現代部会
井上　栄次さん

昭和35年新潟大学教育学部（歴史専攻）卒業後、社会科教諭として主に新潟市内の中学校で教鞭をとる。

町史編さんに対する抱負は、横越町の小学校六年生が読める歴史の本でありたいとのこと。

大正時代の小学校の様子
―「藤山の郷土誌」から―

「おらの学校行った頃の話なんて聞くと、たまげる事ばっかだわの。＜中略＞学校も今と違うて丸山尋常小学校だったし、道が悪うて苦労した。周りは山ばっかで、道巾も狭く、草もぼうぼう生えて蛇がよう出て来て、ほんねおっかねかった。」

昭和五十六年発行の「藤山の郷土誌」＜二十日会編＞第三編、民話と文芸の回想記に、大正末期頃の小学校通学の思い出が聞き書として載せられています。

大正十年（一九二一）十二月大江山村丸山尋常高等小学校に委託教育されている藤山児童の委託費問題の調整がつかず、小杉尋常小学校に通学するように勧奨され、これに対する反対運動がおこったとされています。

藤山児童の委託授業が解除になり、小杉尋常小学校に通学するようになったのは、昭和二年（一九二七）四月のことです。

「一年の時は、修身とよみかただけ、石板と石筆で字を書いた。二年生になるとやっと帳面と鉛筆で字を書いた。三年になると算術と書き方があって、数を習い、かけ算の九九も習うた。毛筆も三年から。五年生で、女の子には裁縫の時間があって、この時初めてパンツの縫い方を教えられ、自分で縫って生れて初めてパンツというもんをはいてみた。嬉しかったの。それ迄（まで）裸の上にそんま、きもん着ていたし、腰巻きなても学校終ってからだすけの。地理とか歴史、理科なてもこの学年から習うた。」

わずか、七十年程前の小学校の様子が生き生きと記されているのを読むと、現在の学校生活が、夢なのではとも思われます。

他のところでは、「守り子学校」とも呼ばれたように、家庭では大人が野良仕事に忙しく、小さい子供は大きな子供に子守をさせて学校に通ったものだそうです。子守りをしながら先生の話を聞き、泣けば、泣き止むまで外に出て、又、机に向かう。

こうした学校生活を送った人が、現在の人と比較し、人間として劣っているとは思われません。そして、大人も子供も、働くことがあたりまえのことであった時代に、学校が、楽しみの場であったことから、教育とは何かということを今更ながら深く考えさせられます。

昭和8年頃の小杉小学校